

## 6. 下吉野の女性高齢者と朝市(下吉野)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/4851">http://hdl.handle.net/2297/4851</a>

## 6. 下吉野の女性高齢者と朝市

松本 康子

- I はじめに
- II 住民の年齢構成
- III 高齢者の日常と女性高齢者
- IV 女性高齢者の「労働」について
- V おわりに ー下吉野における女性の「老後」のありかた

### I は じ め に

下吉野を調査して、強く印象に残ったことに高齢者の労働の様子がある。どこの家庭のお年寄りも、実によく体を動かし働いている。実際に区の人々、また、お年寄り自身からも、それを裏付ける発言を耳にした。その姿は、田畑で、庭先で、そして特に週に3回の朝市の取組みで見かけられる。もともと「この地区では昔から日のあるうちはとにかく田畑にいて働いているべきで、家に日中いるということは許されない」(30歳代男性)というように勤労を尊ぶ気風があるが、そのみでは説明しきれない傾向があると思われる。また、60歳代後半以上でリタイアした人々について、「昔なら年寄りやったけど、じいちゃんばあちゃん、というには元気だしちょっとはばかられる」(40歳代男性)という声も聞かれたし、彼ら元気なお年寄り連のことを、『中ばあさん』と形容するインフォーマント(40歳代女性)もいた。いわゆる「高齢者=全く依存的な存在」という短絡的な見方は、ここでは当てはまらない。そこで本論では、特に女性高齢者の家庭内外での労働、朝市活動の事例の分析を通じて、その活気ある生活の実体について探りたいと思う。なお、何をもって高齢者とするかは何を基準とするかで様々に考えられるが、ここでは国勢調査などの公的な統計を使用するため、それらセンサスで区分されているように、ひとまず65歳以上を区切りとする。しかし、これはあくまでも便宜的な目安であって、当地区で高齢者とはどういう存在かということ定義するものではない。この地区では、年齢による基準はあまり実際的なものではなく、調査から総合すれば、「年寄り」という人々の条件は、孫の世代が生まれており、退職していて、家計への寄与のノルマから開放されているというところであった。本論ではその条件にほぼ当てはまる人々を高齢者として扱いたいと思う。概して実際の年齢からすると男性は若くて60歳以降、女性は57、8歳以降というところである。ただ、本人の個々の状況により、それは高年齢方向へ5歳前後ずれることも有り得る。

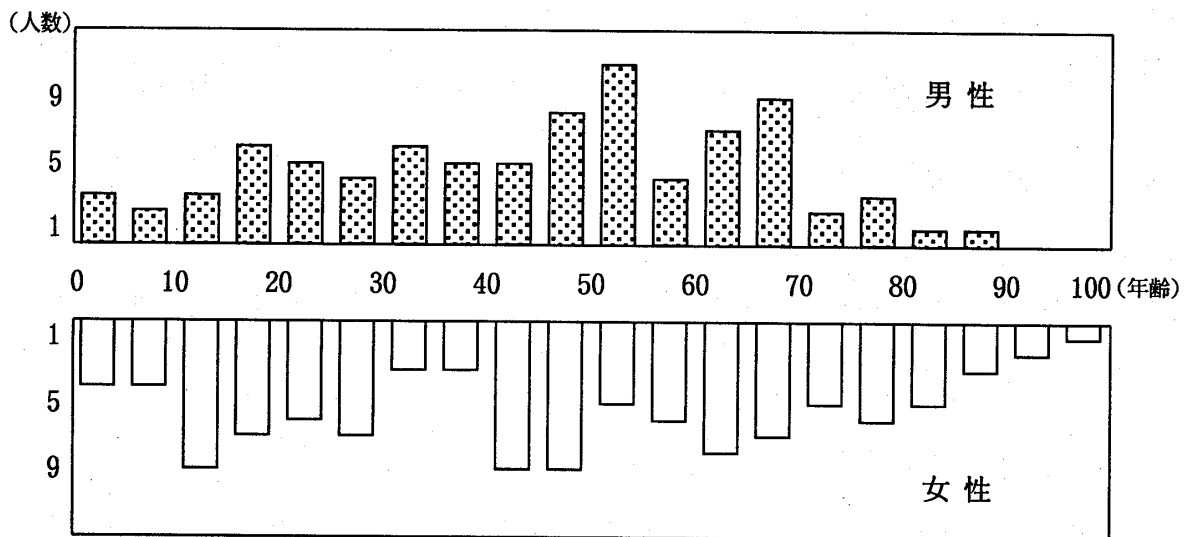
### II 住 民 の 年 齢 構 成

高齢者について論じるにあたって、まず当地区に、調査の時点で実際に居住している住民の年

年齢構成を見ていく（図-1参照）。

分布を概観して言えることは、やや高齢者の割合が高いとしても、若年、壮年層が極端に少ないわけではないということである。下吉野は、いわゆる過疎化して高齢者の割合が非常に高い地区ではない。それは、吉野「工芸の里」の設立に伴って移住した工芸家などの世帯を除いた、実質的に集落を形成している世帯数42のうち、子供（その年齢は別として）と同居する世帯が38あり、高齢者の単独世帯、および高齢者夫婦のみの世帯が2世帯ずつと少ないことから伺われる。この地区にも都会への労働力の流出、少子化、第2次大戦の影響などによる人口の変動は起こっているが、現在のところそれらは上述の傾向を崩すものではない。

図-1 下吉野地区住民の年齢別構成



1994年7月25日現在 居住実数（住民票のみの居住者は含まない）

### Ⅲ 高齢者の日常と女性高齢者

下吉野の高齢者は、朝は早くから起き出して朝食前にまず田を一回り見て歩くことが日課になっている人も多い。他の家族が起き出してくる頃には家に帰り、食後また田畑に出掛けていく。特に女性高齢者は午前中は草むしりを始めとして、野菜を漬けものにしたり、時期になると山に山菜や寿司用の笹の葉を採りに行ったりと、体の具合が許すかぎり動き回り、家の中にぼーっとしていることは少ない。休むのは一仕事終わってからで、早くて10時ごろからである。11時頃になると近所の仲良しが集まって、家の中で談笑している姿もかなり見かけられる。その後昼食には家に帰り、少し休息をとってからまた畑などに行く人も多い。あるいは靴下の下請けの内職などに精を出す人もいる。薄暗くなってくるとさすがに家にいることが多いようだ。そして入浴を済ませると他の家族よりも早めに床に就く。

下吉野では家の中で最も発言権が強いのは、一番収入の多い男性である。息子がこの「稼ぎ頭」になると、寄り合いにも息子が出るようになり、父親は第一線から退くことになる。一般にはちょうど父親が定年になると、この現象が起こる。父は無職、あるいは再就職しても以前より軽い仕事に就くこととなり、社会的にも家庭内でも代替わりが起こるわけである。夫の代替わりが起こると連動して妻の代替わりも起こる。普通夫がリタイアするころ妻も仕事を離れる。下吉野ではまずどここの家庭も原則的に共働きなのだが、下の世代がいる場合、高齢の女性が家事や家計全体についての責任を負うことは基本的でない。つまり夫婦とも責任の重いノルマからは解放されているのであって、その意味ではたしかに「じいちゃんばあちゃんはきままにやっている」という若い世代の言葉は正しい。が労働を尊ぶ気風からか、なにか収入に結び付く活動を行おうという態度は強く、田の管理や野菜畑の手入れは高齢者が引き受けていることが多い。また孫の世話をするという役割については、その責任はほとんど強要されない。下吉野では家に無職の高齢者がいても2歳からは保育園に入れるのが常識となっている。なかには他地域に婚出した娘の子をお守りしている家もあったが、それはわずかであった。

なお、子供世代が同居せずにいる世帯もわずかだがある。いわゆる高齢者夫婦世帯である。その場合はやや状況を異にする。それらの世帯では、成員は既に定年を迎え、60歳代であることが多い。しかし彼らはまだ体力的には十分に地域の事業や村の組織のために労働できる余力を残している。地区の寄り合いにはその世代の男性が出席することとなる。村の人々はこの人々について、以前は年齢的には「おじいさんおばあさん」として認識していたが、現在は違った存在として認識しており、いみじくも「中じいちゃん、中ばあちゃん」という言葉を当てていた。

さて、続いて、地区組織や地区活動の中での高齢者について、記述していきたい。

下吉野には高齢者の参加している組織や活動として、五十路会、老人会、笑和会、総会がある。そのうち、高齢者が主体となっているものは、老人会と笑話会の2つに限定される。総会には一般的な定年の年齢を過ぎた人もかなり参加しているが、彼らは息子が他の地域に出ていたり、自分が自営を営んでいたりして実質的にはその家の代表という地位を負っている人である。また五十路会はその名のごとく50歳代の人々によって構成される会であったが、定年の引上げなどによりその年代の人だけでは会の運営が困難となり、脱退年齢が引き上げられたという経緯がある。

ここで、老人会の様子について概略を示したい。老人会の組織、活動概要は以下のようなものである。入会条件は60歳以上男女（参加は任意）、役員としては、会員、副会長、その他会計などがある。実質的な参加人数は25人前後（60歳以上全人数60人の内）で、活動内容は、年2回の温泉親睦旅行（総会を兼ねる、費用は自己負担）、新年会、中宮温泉へ出掛ける（月1～2回）、おぼけ杉の掃除、神社の掃除、ゲートボール、「お達者大学」などの吉野谷村主導の行事への参加である。会費は年1,000円となっている。

総じて、活動はイベント的なものと、地区への奉仕活動に大別できるが、どちらも毎年決まっ

ているという感じで、地区の老人達はすごく熱心であるというわけでもない。「お講があるし、日頃田畑で顔を会わせているから、あんまりみんなが熱心でなくてもいいのでは」という言葉も聞かれた。しかし、女性高齢者の中にはゲートボールに頑張っていて取り組んでいる人達も数人いる。また、村主導の趣味の講座などにも参加するのは女性が主である。

次に、笑話会についてであるが、これは婦人会や他の団体がない頃（20年以上前）に女性の高齢者があつまって有志で結成したもので、そのメンバーのままで続いているので、会員はみな80歳代になっている。「仲良し会」のようなものだという。活動は年1回公民館で会食をすることになっている。参加者4人程度である。

次に五十路会についてである。全くの親睦の趣旨で40年ほど前に作られた会である。もともと、壮年団、婦人会をやめてから老人会に入るまでの過渡期に何も属する会がないので作られたものである。元来老人会に入る年齢になれば脱会するという主旨だったので名前も「五十路会」といったのだが、現在は脱会年齢が70歳に引き上げられ、老人会と双方に所属している人もいる。現在会員数は25人ほどである。活動としては、月5,000円の積み立てをして温泉旅行、宴会などを行っている。しかし、地区の仕事として祭りの際に家毎に飾る灯りを作ったり、現在は僅かながら公共の役割も担っている。男性に比べ女性の活動への参加はあまり活発でない。

最後に総会についてである。これは各戸から代表が1名出て、地区のことについて話し合うものである。その代表は普通各家の当主と見なされる人がなる。直系家族では通常は高齢者ではなく息子がその役を担うのであるが、息子の世代が遠隔地に住んでいるなど、なんらかの理由で恒常的に地区の仕事に関われない場合、引き続き定年を過ぎても出席することになる。

下吉野では地区の仕事に多くの高齢者が関わっている。地区主導で行われている仕事には工芸の里、地場産業振興関係のものが多く、またその計画にもリタイヤした高齢者は被雇用者として初めから計算に入れられている。具体的には下吉野特産のかきもちの製造をしている「かきもちセンター」の従業員として、また工芸の里と同じ敷地に出されている「朝市」の野菜などの生産、販売の主体として多くの女性が活躍している。工芸の里の草むしりなども村からの依頼で彼女達が行っているし、そうした労働にはもちろんいくばくかの報酬も伴っている。男性も、下の世代が地区に不在で高齢者が代表として総会に出席しているうち何人かは、それらの担当者、実質的なまとめ役として辣腕を振っている。また老人会長、神社総代、真宗の在家の指導者として頑張っている人もいる。つまり、体がいうことがきかなくなるまでは、地区に働く場は存在しており、実際若い者も全く顔負けの元気さで熱心にそれらに取り組んでいる人も多いのである。高齢者になっても個人の趣味のサークル活動などの付き合いのみでなく、自分自身の利益を得ることも目的として、地区の事業に参加するという風潮は、男女を問わず強く存在すると言えるであろう。

#### IV 女性高齢者の「労働」について

##### 1. 農作業と内職について

これから論じる労働とは、基本的には家庭内で従事する、収入をとまなう労働である。ここでいわゆる育児や家事のような消費面の労働に言及しないのは、上述のように、これらの仕事はこの地区の直系家族世帯では高齢者が担うべき責ではなく、主に下の世代の既婚女性、すなわち「お嫁さん」の仕事とされているからである。これは一般的な高齢者の在り方とは多少違った傾向であるかも知れない。ともあれ、家庭内での女性高齢者の仕事は、第一に「普段の田畑の世話（特により手の掛かる畑）」というのが一般的な認識になっている。

A家では、田を3反、畑2反の耕作をR子さん（60歳）が受け持ってやっている。米は自家消費費用、野菜は朝市に出したり、市場にも出荷している。B家では、8反の田をS夫さん（69歳）が、畑はその妻のT子さん（65歳）がやっている。自家消費費用が大部分である。田の普段の管理はS夫さんだが、田植えや稲刈りは息子に任せている。C家でも畑の管理はU子さん（80歳）の仕事で、消毒、杭打ちなども自分で行なっている。収穫は自家消費費用と朝市での販売に充てる。D家では田を8反、畑を2反ほど老夫婦が耕作している。さらにE家では、この地区で最高齢のV子さん（95歳）も、体の調子が良いときは必ず畑に行く。畑は村外れにもあり、さすがに行き帰りに時間がかかるようだが、行かずにはいられないということである。腰をいためたりするため家族は心配しているが、好きなようにしてもらっているということである。

逆に畑の面倒を見る高齢者が亡くなったため、田や畑の耕作を休んだり、人に貸すことにした家もある。F家は7反の田があり、JAにも出荷していたが、今年W子さん（62歳）が入院したため休耕している。また畑の収穫も朝市に出していたが、これも休んでいる。G家では、田はJAへ依頼している。畑はX子さん（67歳）が1反あまりに花や野菜を作っている。

なぜ高齢者が田畑の管理を日常的に行なっているかという問いに、以下のような答えが返ってきた。「年取ってもただおれんわね。昼間うちでぼーっとしとってもしょうむない」（79歳女性）。「昼間家におってもなんの楽しみもない。田畑はぼけ防止や」（80歳女性）。「嫁さん達は仕事に出ていて忙しいしそっちで頑張ればいい。働きに出たらん自分が畑をやればいい」（67歳女性）。「息子や嫁は田をやりたがらないし、それに嫁にどうしてもやってもらいたいとも思っていない」（79歳女性）。「畑は勤めとちごうて気ままにやれるからいい」（60歳女性）。このように、畑仕事は昔からやり慣れている仕事でもあり、自分のペースでできること、なんらかの利益につながることで、そして健康に良いということで、高齢の女性達は自分がそれをやることに概して肯定的であった。

しかし一方で「米は作るよりJAから買った方が早い」（67歳男性）という意見もあり、農業労働において経済性は二の次で主たる要因ではないという点も見逃せない。「田畑を持っている以上、草ぼうぼうにしとくのは近所に迷惑だし、肩身が狭い」という言葉もそこで聞かれた。

これはいくつかの家で特に女性の高齢者がおこなっている、地区に誘致設立された靴下製造会社の、下請けの内職でも聞かれたことである。「夏に扇風機をつけながら靴下の裏返しをしていても、電気代を考えると赤字かもしれん」(79歳女性)とあるように、実質的に収入増になるか否かにかかわらず、四六時中働いているのが美德でもあり習慣でもあり、そうせずには調子が悪いとさえ言う人もいる。

実際、調査での印象は「お年寄りがとても元気で生き生きとよく働いている」というものだったが、これはしなければならないノルマとしての労働ではなく、ある種の充実感のある自発的活動かも知れない。

## 2. 朝市の取組み

上記のように下吉野の多くの家は畑を持ち、自家消費用に野菜類を栽培している。この新鮮な野菜の販売を地区の村おこしの一環にしようと、「朝市」が計画されたのは1988(昭和63)年のことである。これは当時の生産組合長をやっていたYさん(65歳男性)が発案し、方々のそれらの取組みを視察したりした後に1989(平成元)年に始められたものである。はじめは無人販売で行なっていたが、こころない利用者がいるということでまもなく週4回(日火木土)の有人販売に切り換えた。現在は日水金の週3回になっている。調査に訪れた日も何台もの自家用車が午前6時前から開店を待っているほどの盛況ぶりを呈していた。またそこでかいがいしく働いているのは女性の高齢者達であった。この朝市の取組みは下吉野の高齢者の諸活動中でも、大変注目に値する活動であると思われる。そこで以下、下吉野における高齢者の労働の一事例として、詳細を記述していきたい。

### i 発足と経緯の組織

前述のようにきっかけは個人の発案によるものである。他の地域で多く見られるようなJAが管理しているものではなく、下吉野地区の特産部会の下部組織である。動機については「老人の働く場を作りたい」というものであった。そこで区の総会にかけコンセンサスをとった後、村役場に要請して竹下政権の「ふるさと創生資金」の一部を借り入れ、朝市用の建物を作った。土地は国道157号線に面した「工芸の里」の一部を無償で借り入れている。さらに朝市の参加者と管理をする人の組織を作り、「山法師会」と名付けた。これは地区の名勝であり、工芸の里のすぐ裏にあるおぼけ杉の禅智大師の伝説にちなんだものである。発足当時は男性3人(管理)、女性13人(生産販売)ほどの構成であった。現在、会長は区の特産部会のメンバーであるA氏(50歳)であり、そのほかに世話役としてB氏(53歳)、発案者のY氏(65歳)が参加している。商品の生産と販売を担当する女性は10人である。最年少が65歳、そして66、67、68、69、73、76、77、79、80歳が各1名ずつである。一年中開いているのではなく、6月にはじまり11月23日の勤労感謝の日まで行なわれる。冬は普通雪に閉ざされるため農作物はあまり収穫出来ないし、また春の農繁期で忙しい。そこで一段落した6月の某日に開始するのである。店番は生産者の10人が2人

ずつ組を作って、当番として1回ずつで順番に行なう。

## ii 現在の朝市のようす

朝市で販売するものは、全て下吉野で生産、採集、加工した農産物、食品、花などである。何が店頭に並ぶかはもちろん季節によるのであるが、いずれも旬の新鮮なものである。試みに1994年7月24日(日)の商品をあげると、トマト、ピーマン、ししとう、大葉、きゅうり、にんじん、たまねぎ、じゃがいも、長瓜、なす、とうもろこし、メロン、葉っぱ各種、金時豆、またたび、奈良漬、かきもち(すでに焼き、又は揚げてある)、花束(普通用と仏花用)であった。畑の産物が主であるが、庭に植えてある木のなりものや近くの山から採集したものも並べられている。人気の漬物は畑で取れたものの自家製で、かきもちも自家製のものとかきもちセンターのものを加工して出している。いずれも見栄えの良いものばかりで、形の悪いものはほとんどない。メロンなど少々のもを除いては、売価はすべて1袋100円と定められている。

価格はメンバーの協議で、朝市活動を始める6月以前に決められる。ほぼ、市価の半額から3分の1になるようにする。また、袋の容量にばらつきがあると、同種の商品を出した他のメンバーに迷惑がかかるため、1袋に入れる量も決めておく。

その日の販売の終了後、誰の出したものがどれだけ売れたかを当番が記録、計算し、会長のA氏がまとめて毎月に生産者にそれを渡す。その際1点につき10円は経費として会が徴収するため、実際は売上の9割が手元に入ることになる。徴収した経費はプールして、客用の買物袋の購入などにあてる。

実際、見ている間にも商品は飛ぶように売れ、特に数が少なく人気の高いメロンは、並べる間もなく運んでくる台車から客達が奪い合って確保していた。開始時間は午前6時30分である。以前はお客が早く来て取り合いになるので7時から始めるように決めていた時もあったが、それでは客をかなり待たせておかねばならないので、早めにしたとのことである。お客の第1波は6時から6時半の間、つまり開店を目掛けてやってくる。その後ひとしきりやや静かになるが、第2波は9時から10時頃現われる。客は下吉野の地区の人もあるし、鶴来、野々市、金沢市南部の住宅地から来た人が多く、中には観光旅行中に通りかかった大阪の観光客もいた。黙っていても結構売れるのだろうが、実際は当番以外も販売にひとしきり加わり、セールストークも賑やかに、中宮温泉から汲んできた温泉水をコップで供しながらの売り込みは、熱心でなかなか商売上手な印象が残った。

終了時刻は日によってまちまちで、全部売り切れてしまえばもちろん終わりであるし、平日は売れ残ることもあるので午後2時から3時頃までやっている。日曜日はほぼ午前10時には売り切れてしまう。また、客の指定した日に野菜などを確保しておく注文販売も受け付けている。「長瓜24個」などと注文書を書いていく。)平日は平均500点、日曜はその倍程売れる。メンバーの一人一人がどのくらい出しているかということ、多い人では150点、少ない人でも20点ほどである。



なお、露店に近い小屋に似た設備であるため天候には左右されやすく、やはり雨天時には客足は減るということである。

山法師会は、朝市の販売以外にも若干の活動を行なっている。一つは研修という名目で他の村や地区に見学に行くことである。年に1、2回行なわれ、これは慰労会も兼ねている。バスは村役場のものを使用し、残りの経費は自分たちで積み立てたものを使う。

もう一つに、蓮池の世話がある。ちょうど工芸の里の道路を挟んだ前が1反ほどの広さの蓮池になっているのである。以前は食用の蓮根を栽培するためのものだったが、現在は花がきれいな品種を作っている。昔は下吉野に他にも蓮池はあったが、現在はここが残されているのみである。工芸の里に来る観光客の印象に訴えるために蓮を栽培しており、それを山法師会が担当している。確かに蓮池は朝市の場所の真ん前にあるのだが、朝市のためだけと言うよりは、地区の観光のための環境整備の一環を割り当てられていると言うべきであろう。

### iii 地区内での朝市についての評価

前述のとおり、下吉野の朝市は盛況を呈しているのであるが、これにはこの地区の立地条件の有利さも一役買っている。ここで朝市が顧客を獲得できるのは、よく整備された国道157号線の存在があるからである。そしてこの地区が金沢や野々市、鶴来などへの通勤圏であることとも無縁ではない。市街地の住人が自家用車でこの朝市だけを目的に来ることにメリットがある程度の近さに、下吉野はあるのである。かつて、道路の整備とモータリゼーションの進展が起こる前は、鶴来町がこの地域の市場町としての機能を受け持っていた。そしてこの地区は、田畑は多いとは言え山村の村であった。しかし現在では、都市近郊農村へと変貌している。その変化を踏まえ、下吉野の朝市はマーケティングの機会として成立しているのである。

「朝市については、よく思っている人もそうでない人もある」(60歳代女性)という言葉が、朝市についての地区の人達の考え方を総括したものである。非常に熱心に支持し参加している人もいれば、消極的な人もある。

支持者の意見は次に挙げるようなものであった。「今まで食べ切れずに捨てていた作物を無駄にしなくてすむということはとてもいいことだ」(79歳女性)、「朝市が出来てから村(下吉野地区のこと)が明るくなった」(65歳男性)、「少しでもばあちゃん達の小遣い稼ぎになっていいんじゃないか」(51歳男性)、「少しでもお金が入るのは楽しみ」(79歳女性)、「お客さんとのやりとりが面白く、また勉強になる」(80歳女性)、「勤めがある人などが買いに行けて便利」(83歳女性)。

一方、消極的なものには、「余りものを出すのではなくて、やっぱりきれいなものが売れるから、今は半営業になってしまった」(65歳男性)、「おばあちゃんたちが野菜を出さなければならなくなったので、なんだか生活が目まぐるしくなった」(48歳女性)、「売物にするので自家用に使うのにお嫁さんが気兼ねすることがある」(62歳女性)などがある。また、やはり体が元気でないと続けられないため、体調不良で続けられなくなった人もいる。

このような意見はやや聞かれたが、推進者の弁からはこの事業の目的についての肯定的感情や実際の達成感がうかがわれる。一定の消極的意見もあり、単純に評価はできないが、事業の目的、つまり「高齢者の働く場を作り、同時にまた村起こしに役立てる」という観点からすると、やはり朝市は区の中で良い評価を得ていると思われる。発足して4年目になるが、次第にその規模は大きくなりつつあり、経営も試行錯誤を経ながら漸次改良が加えられている。現在、当初の借入金はまだ返済していないとはいえ、経営が軌道に乗っていることは明らかであり、さらに区としてはその利用者の増加をねらって水車小屋風な小屋を建てる為に300万円もの貸付を行なっている。つまり区としても更に規模を拡大し、この事業を続けて行くつもりであるのだ。これは区の中での評価が低ければ現実としてありえないことである。朝市はその意味で成功だったといえるであろう。

#### iv 女性高齢者にとっての朝市の意味

この事業は、下吉野地区の主に女性の高齢者が参加することを当初から意図して作られたものである。現在、この地区に居住している65歳以上の女性の総数は29人である。そのうち朝市の参加者の最高齢は80歳であり、この地区に10人いる81歳以上の女性高齢者は、主として健康上の理由で参加が難しいと思われる。そこで実質的に参加できる年齢を80歳以下に限定してみると、参加比率は52.6%（19人中10人）ということになる。すると、高齢の女性のうち働ける人の半数以上が朝市に参加していることになる。朝市の加入や脱退は任意性が強いことを考えると、この参加率は決して低いものとは見なせない。

その背景として、高齢の女性の後ろには、家族、特に下の世代の既婚女性、つまり「お嫁さん」の協力があるということ、これは無視してはいけない事柄である。参加者10人は何れも嫁（1世帯は例外的に実の娘）と同居している。このことは、彼女達が家事のノルマの主たる責任者ではないということを示している。前述したがこの地区では一般に、家の主の地位が父親から息子へ渡った時点で、家事の責任は姑から嫁へ引き継がれる。それからは家事労働は嫁のノルマとなり、高齢の女性は完全に家事に従事しないわけではないが「きままな」状態になるのである。もちろんそれまで主婦として頑張ってきたわけであるから、リタイヤし十分に余暇を楽しんでもらってしかるべきである。若い世代の女性達もそれは十分に承知しているため、このことによる不平などは一切聞かれなかった。しかし、やはり朝市の活動をするためには高齢の女性をバックアップする人々は必要であり、そのような人々の存在なしにはこの事業は成り立たなかったであろう。下吉野では独居の高齢者や高齢者のみの世帯が非常に少ないということはすでに述べたが、このことが朝市の発足の基礎となるものであったと言えよう。

さて収入についてだが、ここで試算してみたいとおもう。平日に全体で約5万円、日曜日にその倍の売上があるとされるが、それは、週約20万円、月約80万円の売上があるということになる。そして朝市は実質的に5ヶ月半ほど開かれているので、単純計算すると440万円、少なく見積もっ

ても400万円程の売上になるはずである。その内1割が会の経費となり、生産者のもとに配られるのは360~400万円ということになる。少ない人でも20点は出すということなので、最低でも月に3万円弱の収入になるはずである。もちろんこの中には原材料費（苗、肥料代）が含まれているが、これらは自家用のものとして世帯全体の家計から支出されていることが多い。収入の使い道は「孫の小遣い」「嗜好品を買う」などが聞かれたが、高齢者達は「自分の自由になる金」という感覚で話していた。自作地があり、畑を遊ばせておくのものはばかられ、若い頃から慣れた手練の技である野菜作りで、半年間、年金以外に最低でも月2~3万円の収入があるということは、高齢者にとって朝市に参加する充分な動機付けとなることである。体調がすぐれなくなったり、営業をする以上ついてまわる、自家用のみの生産の時よりはノルマ的なものになるという点を好まない人も半数いるが、これはやはり個人の志向の問題であり、加入は任意であるということで組織の弾力性とも受け取れる。ともかく、ほとんど全ての家が自作用の畑地を所有し、野菜の自家用生産を行なっているという下吉野においては、朝市の取組みは高齢の女性に任意に加入できる働く場が得られたということであり、わずかでも収入につながる機会が増加したということの意味している。

また、この取組みは60~70歳代の女性にとって新しい体験であるという点に着目したい。聞き取りでも「いままで、お上（政府や農協のこと）が値段を付けて百姓はそれに従うだけだったが、自分達で値段を決められるとやりがいがある」（山法師会世話役の65歳男性）というものがあつた。まさに、彼女達が実に生き生きと働いている原因はそこにあると思われる。朝市以前は彼女達の農業労働はJAを通して市場に出荷する、または家庭用に供するという2つの道しかなかった。そして自分から価格を決定したり、その収入を自分個人のものとして扱うことは殆どなかった。収入にはなるが、家計のため上から決められた価格で生産者としての責任を重く負いながら生産すること、あるいは家計の補助的な役割として現金にはならない自家消費用野菜をつくることの2つと比べれば、自分で値段と出荷量を決め、自分の都合に合わせて任意に参加でき、個人的な現金収入につながる朝市は、やりがいのあるものと感じている高齢女性が多いのもうなずける。

しかし、ここでやや気になる点もある。現在顧客の数や顔触れが固定しつつあるという点である。日曜日はほとんど売り切れるが、平日は少し余るということなので、商品の需要と供給のバランスがほぼ取れているということになる。ということは、今以上に山法師会の加入者が大幅に増えるとすれば、供給過剰に陥る可能性もある。そして顧客がそれに応じて増加しないなら、現在多く出品している人の出品数制限をしバランスを取ることが考えられる。しかしそれは朝市の主旨とはややずれている。むしろ新たな顧客の創出のための工夫や努力に力を注ぐ必要が生じると考えられる。また、万が一そのために会への加入がしにくい状態が生まれれば、これもまた会の主旨と反することである。やはりパイ全体を大きくするほうが、区にも参加する個人に

も利益が大きくなるのである。

以上、朝市の取組みが下吉野の地域性と有利な条件を生かし、地域の女性高齢者の適性と実態を踏まえ、ある意味の活力を引き出した事業であることがあきらかになった。ごちそうになったトマトのみずみずしさを深く記憶するとともに、この事業の行く末を区の人達同様、興味深く見守っていきたいと考える。

## V おわりに 一下吉野における女性の「老後」のありかた

「わたしらの親の世代はこんなに長生きじゃなかった」(80歳女性)との言葉どおり、高齢者の寿命の伸びは全国的な傾向として明らかである。少子化と平均寿命の伸びにより、末子が成人すると数年を経ずして親が生涯を終えていた時代とは異なるライフサイクルが出現し、現在それが主流となっている。高齢者にとってみれば、これは「老後の長期化」ということである。退職年齢の引き上げも起こっているが、退職後も元気で活動することができる高齢者の数は大きく増えている。特に、寿命の男女差により、女性の高齢者の割合が多いという事実から、女性高齢者の労働力を活用していく必要は大きいと言えよう。

さて、ここ下吉野では前述の朝市の活動など、元気な女性高齢者の活力を地区の労働力として取り込んでいく仕組みが作られつつある。現在政府をあげて取り組んでいる高齢化社会対策の方針にあるような「高齢者の経験を生かした地域社会への参加を」「就労の意欲を持つ高齢者に労働の機会を」というスローガンの理想を、すでにある程度成功裡に実現しているのである。

その要因としては、下吉野では、おおまかに言うと、世帯構成の条件と地区の立地状況という二つがあると思われる。

まず、世帯構成に関しては、老人のみの世帯の少なさが挙げられる。そして高齢の女性が比較的家事労働、孫の世話などのノルマから自由であるという状況が、朝市の取組みを可能にしている。彼女達の子供世帯の同居という要因は重要である。

また、地区の立地についてであるが、この地区は金沢などの市街地へ自動車でも45分程度で行けるという距離にあり、それが、朝市が顧客を獲得するのに有利な条件となっている。また、これは金沢などに通勤できる範囲にあるということでもあるので、若い世代がこの地区に居住しながら都市で就労できるということになり、世帯構成にも影響を与えている。

これらの点で、下吉野はいわゆる過疎問題が起きている地区より有利な点があることを指摘しなければならない。この有利さには、道路整備などが大きく寄与している。

ともかく、下吉野ではこういった諸要因の変化に応じて、高齢者の活躍する場が生まれ、また高齢者自身が積極的に対応している。そして健康な高齢女性の働く場を創出することで「ばあちゃんというのは元気だし、ちょっとはばかられる」(44歳男性)、「ばあさんというよりは『中ばあさん』かしら」(42歳女性)といわれる世代を生んだ。

たしかに彼女達は高齢者には違いない。子供も育て上げ、年金も受給している。ノルマに縛られるのはもうごめんであろう。しかし、実に元気で経験豊かで、確実に地区に一つの柱として活躍できる世代であると言える。そのことは地区に住む若い世代の人々にとっても望ましいことではないだろうか。